

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

こんなことがあった。

なにかなのはずみで、自分のことを書いているインターネットのブログに行き当たった。20年近く前の日付で、当時、わたしが出したばかりの本をこっぴどくけなしている。嘲笑し、事実でないことも書く。言いがかりに近い。

それはいいのだが、最後まで読むと、ブログの主はわたしと高校の同窓生だというのだ。プロファイリングというのか、“犯人”像を割り出そうと試みた。が、そんなことをしている自分が田んぼのヒルみたいに思えて、やめた。

コロナ禍で、パソコンにへばりつく人が増えた。テレワークをし、オンライン飲み会がはやる。オンライン婚活まであるらしい。音楽も映画も演劇も、今後は配信が主流になっていくのかもしれない。

そんな折、ど田舎山奥にあるわたしの田んぼに、わが私塾の塾生が集まってきた。オフライン（現実世界）での農耕接触到、飢えていたのだろう。

ついでにいまふう言えば、「シェアしたい」とも思っていたに違いない。

世界を支配するスーパーIT企業を描くSF小説「ザ・サークル」では、マーク・ザッカーバーグを思わせる登場人物が「シェアはケアだ」とうそぶく。情報をオンラインでシェアする。私生活まで含めてオープンにする。そうすれば、犯罪も、飢餓も、コロナのような疫病も防げる、と。

現実が小説に近づいている。集団の恋愛模様をテレビでオープンにし、ネットでシェアし、炎上しておもしろがる。疫病対策にと、個人情報監視する。シェアはケア、シェアはフェア（公正）である……。

流行に完全に遅れたど田舎百姓・猟師のわたしには、しかし、順番が逆に思える。ケアがシェアだろ？ まず氣にかける（ケア）関係を築く。だから勉強も教えりゃあ、田仕事も手伝う。シェアする。

ケアする氣になるのは、あたりまえだが、オフラインだからだ。じっさいに顔を見て、話をし、メシを食ったり馬鹿笑いしたり、こいつとはノリが合うなと思うから、バンド（一隊、きずな）を組む。

顔も思い出せない高校時代の“友人”は、わたしの文筆活動をケアして書いてくれたのではない。「どうせだれだか分かりゃしない」と日ごろの鬱憤をぶちまけている排泄行為だ。ヒルに吸われたような嫌な感触は、負の感情のシェアだからだ。

「新しい生活様式」とやらの主な手段は、ネットだ。だが、コロナ後のほんとうの闘いは、萎縮と自粛を超えた人間的つながり、濃厚的接触を、なんとしてでも取り戻す、オフラインの闘いとなるはずだ。*

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

顔写真付きでわたしのインタビューを掲載してやろうという酔狂な申し出をしてくださる編集者の方が時々現われ、そのご好意を有難く受けることがある。最近2回ほど生じたそんな機会、写真を撮られることに何のストレスも感じなかったことに少々驚き、ポートレート・フォトグラファーの水準が近頃上がってきているのではないかという感想を持った。

芸能人でもあるまいし、自分の顔を世間にさらしたいという自己顕示欲はまったくない。浮き世の義理というか、メディア世界の「ゲームの規則」と諦めて、撮影に応じるだけだ。だからさっさと済ませてくれと念じているのに、つまらぬ顔を多少見栄えよくしてやろうという親切心からか、ここに立て、あっちを向け、こんなポーズをしろ、いややっぱり場所を変えて……などとうるさく言われ、終わった後でひどく疲れる。

ところがその最近の2回の撮影では、そんな疲労は皆無だった。どちらの写真家も、撮影前からあらかじめその場の空間の構造や光線の具合を熟考し尽くし、最良の構図を思い描いている。和やかな世間話のふたこと、みことでこちらの心を緩め、表情を穏やかにしたうえで、ほんの数回シャッターを切って、それでおしまい。大した技量である。ちなみにその2人の写真家はどちらも若い女性だった。

これは肝心な点だが、2人とも、笑顔になってくれとはことさら要求しなかった。笑みとは内からの衝動でおのずと生じるもので、要求されて浮かべる笑いはことごとく「作り笑い」だ。そして写真をひと目見れば、それが強張った「作り笑い」であることはすぐわかる。

なかには、笑顔の度合いが不満で、もっと笑って、笑ってなどと要求どころか不興げに「命令」してくる人もいる。口を歪めた仏頂面の相手に向かって、笑みを浮かべることが可能だとも思っているらしい。撮影とは撮る人と撮られる人とのあいだのごく親密なコミュニケーション行為であることがわかっていないわけだ。

実際、家族や友人同士ならばともかく、見知らぬ他人に写真を撮られるのは、こちらの心身への一種の「侵襲」行為である。優れた写真家はその「侵襲」性を最低限に抑えつつ、対象の内面にまでずりこみ、そこに潜んでいるものをさっと引き出してくるすべを心得ている。

最近2回、立て続けにして、こういうカメラマンが増えてきたのかと嬉しくなったものだ。同時に、ポートレート撮影はどうも女性のほうが向いているのでは、と思ったりもした。相手の心をさりげなく武装解除してしまう共感能力や柔らかな物言いには、男性より女性のほうが長けているのではないか。こういうのも性差別的な発言ということになってしまうのだろうか。*

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

大阪に、なかなかのバーがある。「なかなか」というのは、そのこだわり方（本来の意味で）が、なかなかなのだ。なかなかどうなのかということ、居心地が悪い緊張感を強いられるのである。オーセンティックな酒場というものは、そこはかとなく心地よい緊張感がうっすらと漂っているものだが、何かこう、ギスギスとした嫌な感じなのだ。

私の連れが、カウンターの上に小さなバッグを置いた。私もそれは行儀が悪いな、と思い注意をしようと思った刹那、「バッグ、下に置いて！」と高圧的な怒声が飛んだ。常識的なマナーに違反したのは連れなので、店主が言うようにするべく促したが、果たして、店中の客に聞こえるように叱るのはどうなのだろう。内装も重厚で、調度品も何やらありがたみのある高級であろう物ばかり。大人の雰囲気、静ひつな中にも高揚感のあるビジュアルなのに、のべつ店主の不機嫌な振る舞いを見せられることになるので、時間がもったいないと思い、2回で行かなくなってしまった。

京都に有名な老舗のバーがある。私の知人が、アポロキャップをかぶって入店したら、即座にジェスチャー付きで「シャッポ（帽子）、シャッポ！」と叱責されたという。その言葉の選び方に世代を感じるが「客とはいえ、店にも敬意を持て」ということなのだろう。しかし、このご時世で室内での帽子が礼を失するという作法は絶滅しつつあるのではないかと思う。私はどうしても気が小さいので、店に入る時には帽子を取ることが多いが、両手に荷物を持っている時などは、店の外で脱帽するほどのまめさはない。そして、新型コロナウイルス禍の今は、入店する間だけマスクを一瞬着用するという儀式を行うことになる。

荷物の置き方や帽子に対して、何か注意の仕方が違っていかないだろうかとも思うが、マナーをたがえたのは客の側なので致し方ない。だが、それとなく「お荷物、お預かりします」「後ろの帽子かけをご利用ください」という案内では済まされず、一旦恥をかかせるというスタイルは、いかがなものだろうか。接客業としてのプライドがあるならば、逆にやりたくないはず、と思うのは私だけだろうか。マスク、検温、手指消毒、これらでまた新たな行儀や作法が生まれるのだろうか。*